

# 八重山郷友会における郷土芸能と構築される故郷について

——1980年代「東京 八重山郷友会」の活動を中心として——

拓殖大学 桃塚 薫

## 1. 目的

本発表の目的は、本土における八重山郷友会の郷土芸能活動を通じて、八重山出身者そしてその子孫の人々が本土での「八重山」をどのように構築していったのかについて明らかにすることである。

発表者はこれまで八重山という地域に焦点を絞り、本土在住者や本土出身の八重山居住者が、八重山古典音楽（唄三線）の学習を通じて複数の「八重山イメージ」を形成する過程に着目してきた。しかし、1990年代のいわゆる「沖縄ブーム」以前の本土における八重山の郷土芸能に関しては、1928年の八重山芸能団東京公演を除いて、社会学的研究で言及されることは少ない。桃塚（2016）は、本土復帰後から1980年代の九州八重山郷友会の活動について考察したところ、郷土芸能活動（学習・公演・聴取）は、参加者の故郷で形成された共同体の都市での維持、郷友会における新たな関係性の構築、琉球と対立する「想像の『八重山』共同体」の形成に重要な影響を与えることが明らかになった。そこで、本発表は同時期の東京八重山郷友会に着目し、郷土芸能活動が上記3つの特性にどのように関与するのかについて考察する。

## 2. 方法

東京の八重山郷友会創立60周年記念誌として発行された『八重山』（東京八重山郷友会創立六十周年記念誌編集委員会 1986）の内容分析を中心とする。同誌は、同郷友会会員や八重山関連の各種団体関係者による寄稿、ならびに60周年の集会の写真によって構成されている。これらの記事には同会の郷土芸能活動（八重山古典、ならびに明治維新後の作曲家宮良長包）に言及する記述が多数含まれる。なお、分析に際しては、同時代の他の郷友会資料を併用し、当時の活動を知る関係者へのインタビューも行う。

## 3. 結論

現在明らかになっているのは以下の点である。同会の郷土芸能活動を通じて、主に八重山1世を中心とする人々は、故郷で形成された人間関係を東京で維持するとともに同会で新たな人々とのつながりを構築した。また彼らは、「想像の『八重山』共同体」を形成するだけでなくそこから分化していくことが分かった。とくに後者については、従来同会のヘゲモニーを握るのは石垣島の中心部（四箇字）出身者でありその他の地域の出身者は周縁におかれる傾向があったが、郷土芸能の発展にはそれぞれの地域が等しく尊重されるべきであるという主張がなされた。

## 4. 参考文献

東京八重山郷友会創立六十周年記念誌編集委員会 編, 1986, 『東京・八重山郷友会創立60周年記念誌』, 東京・八重山郷友会.

桃塚薫, 2016, 「八重山郷友会における伝統芸能と「八重山イメージ」の形成について——本土復帰後の「九州バガースマの会」の活動を中心として——」, 第89回日本社会学会大会報告配布資料.